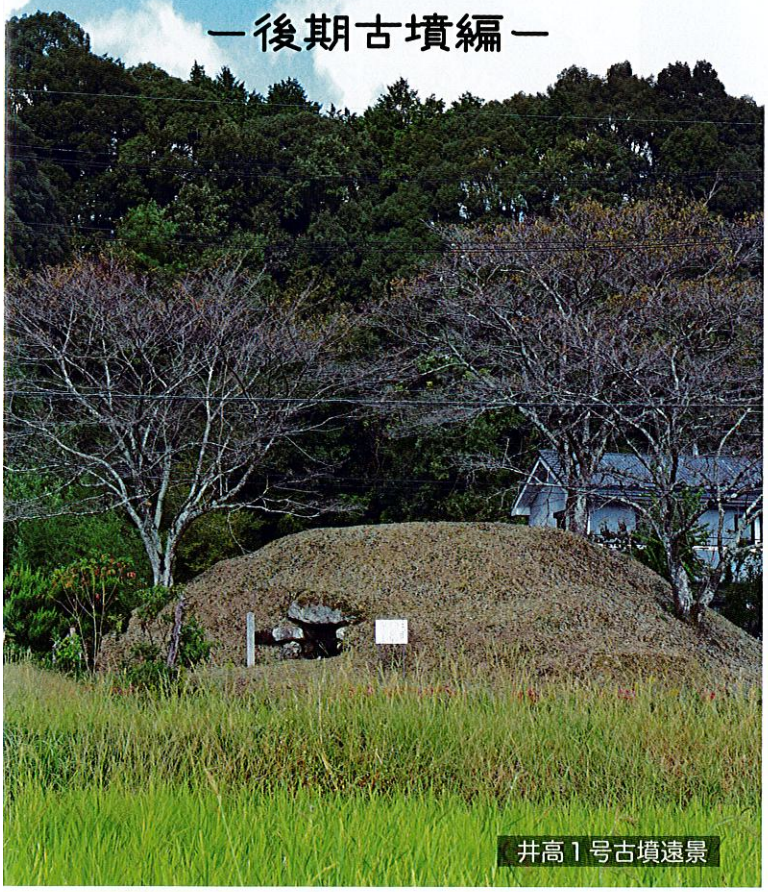
とみかの古墳紹介

―後期古墳編―



井高１号古墳遠景

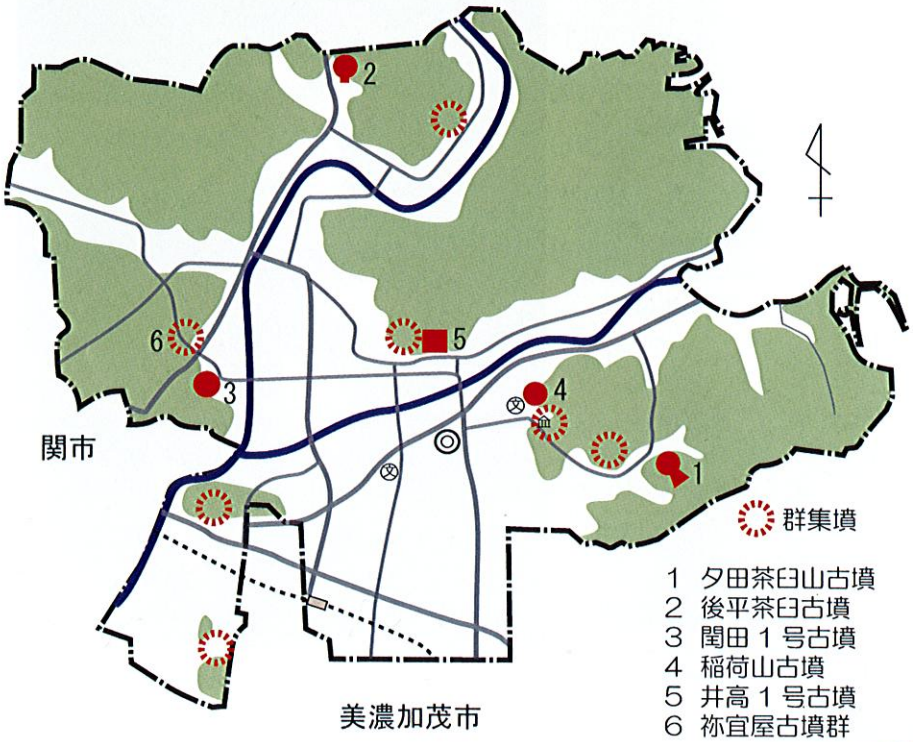
１．富加町の古墳の概要

昭和 44・45 年に富加村(当時)教育委員会が実施した古墳の分布調査を基に平成 14 ～ 16 年度に再調査をおこなったところ、45 箇所の古墳 (古墳群を含む) が確認されました。

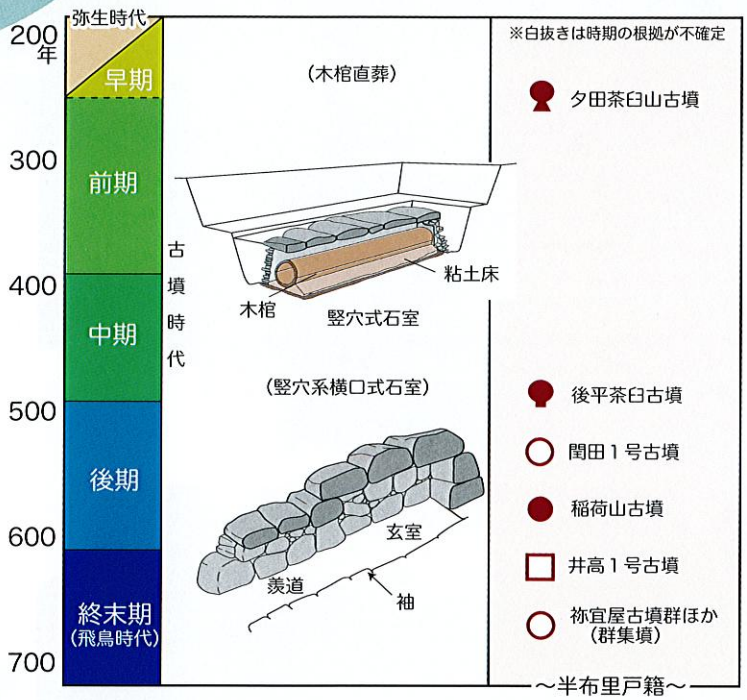
富加町における古墳の築造は非常に早く、3 世紀中頃の前方後円墳と考えられる夕田茶臼山古墳など弥生時代の終末期から古墳時代の初めにかけていくつかの墳墓が築かれます。広範囲に影響力をもつような有力な首長層が誕生していたと考えられます。この時期の埋葬施設は、木の棺に遺体を入れてそのまま盛土に埋めて納めた木棺直葬というものでした。

町内には竪穴式石室が確認されていませんので、明確に古墳時代の前期後半～中期と認められる古墳はありません。発掘調査事例が多くないので、今後に発見される可能性もありますが、現時点では前期後半～中期は空白の時期と考えられます。尾張地方との関係性が指摘される後平茶臼古墳が築造された 5 世紀末ごろまで、広範囲を束ねるような有力首長が存在しない状況が想定されます。

次に、多くの古墳で横穴式石室が確認されていますので、この石室が導入される古墳時代の後期以降に古墳の築造が増えたと考えられます。古墳時代後期以降には、閏田 1 号古墳、稲荷山古墳、井高 1 号古墳などのように有力首長の古墳が継続して築かれています。ただし、こうした大きな古墳は、あまり群集していません。有力首長の古墳が小さなエリアで連続して築かれない傾向があるようで、首長権の継承がどのようにおこなわれたのか興味深い特徴といえます。



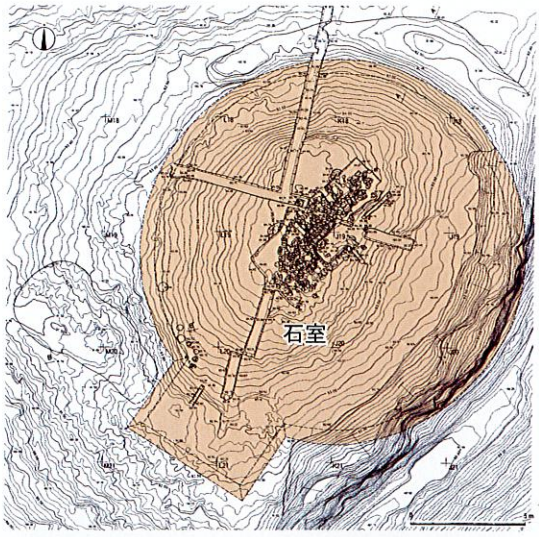
中濃・東濃地域では前方後円墳の築造が終焉を迎えると、それに代わって古墳時代終末期である7世紀初め頃から大型の方墳（四角形の古墳）が有力首長の古墳に採用されたと考えられています。当町においても井高1号古墳がこうした大型の方墳と考えられます。また、終末期には大平賀の祢宜屋古墳群などのように、複数の中小規模の古墳がまとまって築かれる群集墳と呼ばれるものが、町内の各所でみられます。これらは、それ以前に有力首長の古墳が築造された近くの丘陵に多く見られる特徴があります。



2. 後平茶臼古墳

全長19.6mで、円形の古墳に少し四角い出っ張りが付く造り出し付円墳（帆立貝式古墳）と呼ばれる古墳です。平成11年度に富加関IC建設のために発掘調査が実施され、現在は残存していません。埋葬施設は竪穴系横口式石室と呼ばれるもので、竪穴式石室の一方から出入りができるように横口が付いたもので、横穴式石室の影響を受けた過渡期の石室です。築造時期は、出土した須恵器や埴輪から5世紀末～6世紀前葉頃と考えられています。

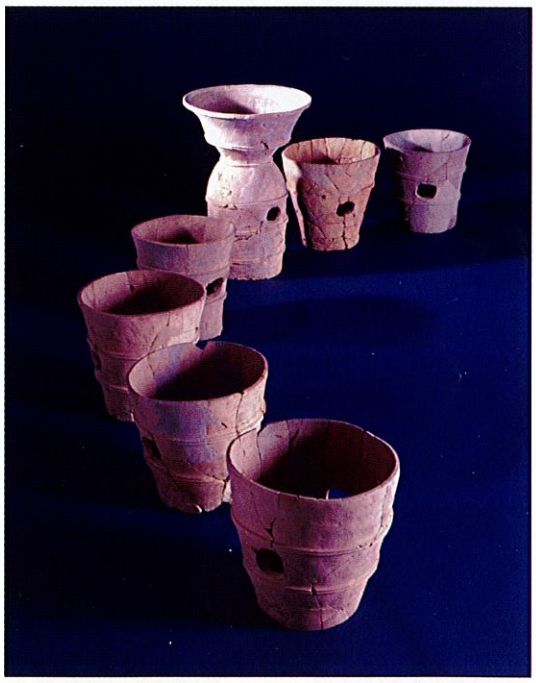
周囲には古墳を囲むように、窯で焼成された須恵質の尾張型埴輪と呼ばれる埴輪が並べられていました。発掘調査では朝顔型埴輪と円筒埴輪が出土しています。尾張型埴輪は、愛知県の猿投周辺の窯で焼かれたもので、愛知県を中心に出土しており、後平茶臼古墳での出土例が現時点での分布の北限になります。尾張地域との交流なども想定されます。また、近隣の可児市において同じ造り出し付円墳である宮之脇11号墳から尾張型埴輪が出土しており、可児・加茂地域の豪族間においても何らかの繋がりがあったと考えられます。他にも、木の芯型に鉄板を貼り付けて造った木芯鉄板張輪鐙や、馬具のベルトを留める鋲具など馬に装着する道具が出土しており、被葬者は騎馬に通じた人物であると考えられます。



後平茶臼古墳の墳丘図

木芯鉄板張輪鐙

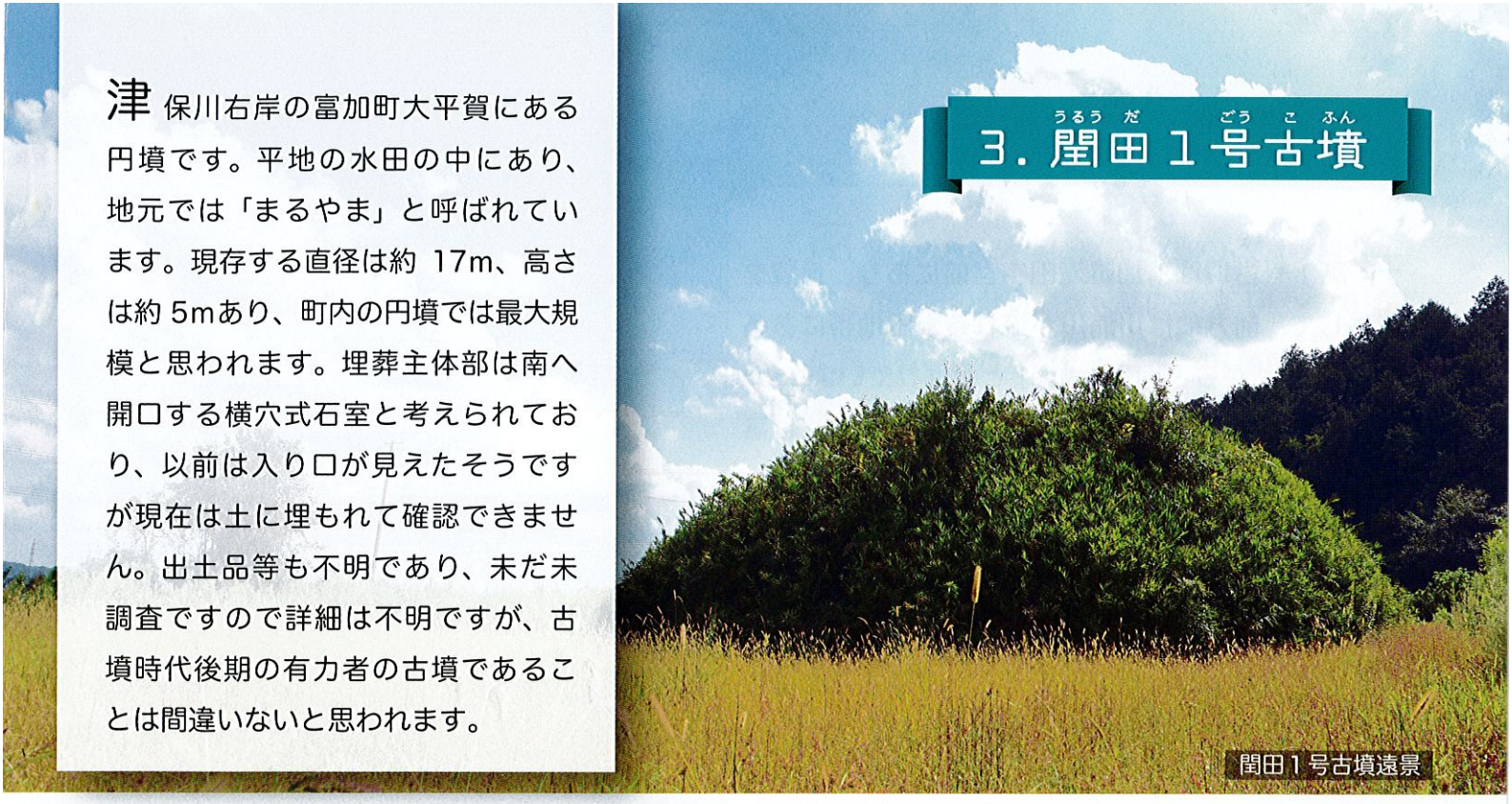
脚付短頸壺


出土した円筒埴輪と朝顔型埴輪

（出土品写真提供：（財）岐阜県文化財保護センター）

3. 閨田1号古墳

津保川右岸の富加町大平賀にある円墳です。平地の水田の中にあり、地元では「まるやま」と呼ばれています。現存する直径は約 17m、高さは約 5mあり、町内の円墳では最大規模と思われます。埋葬主体部は南へ開口する横穴式石室と考えられており、以前は入り口が見えたそうですが現在は土に埋もれて確認できません。出土品等も不明であり、未だ未調査ですので詳細は不明ですが、古墳時代後期の有力者の古墳であることは間違いないと思われます。

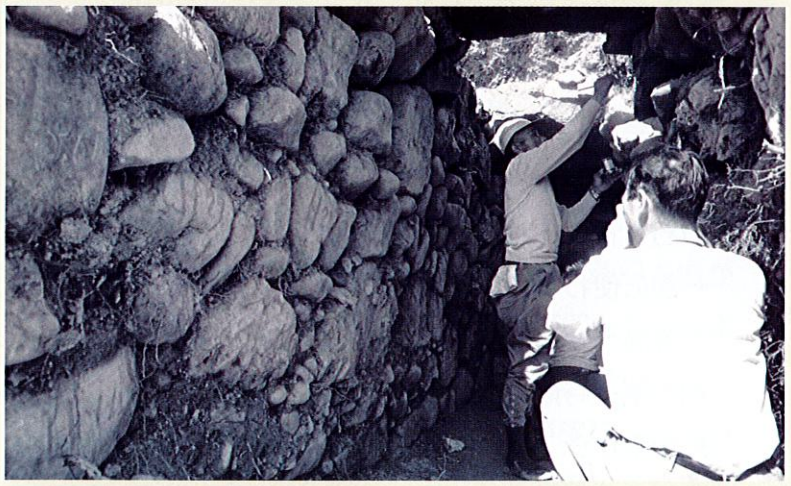


閨田1号古墳遠景

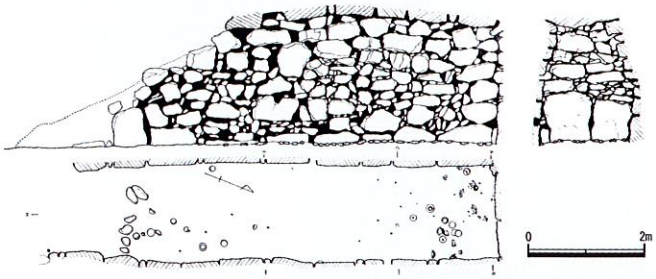
4. 稲荷山古墳（杉洞4号古墳）

昭和 44 年に双葉中学校建設のため発掘調査が実施され、現在は残存していません。独立丘陵の頂上に築造された直径約 15mの円墳です。この古墳は羽生や夕田の水田地帯を見下ろす場所に立地し、山裾には広大な耕地を潤す羽生用水が流れています。水利と関係のある羽生・夕田地域の首長の古墳と考えられます。

石室は横穴式石室で、玄室は長さ約 6.5mの無袖式で、羨道は欠損のため詳細不明でした。石室石材は砂岩とチャート礫が主体で、僅かに円礫の川原石が混じっています。玄室からは蓋坏、有蓋高坏、土師器、短頸壺などの須恵器類、土師器甕、金メッキを施した耳飾りである金環3点、鉄鏃 25 点、刀子 2 点が出土しています。出土した須恵器の年代から 6 世紀後葉ごろに築造されたと考えられ、後述する井高 1 号古墳よりは、やや古い古墳ではないかと考えています。



写真上：稲荷山古墳調査風景
写真左下：稲荷山古墳金環の出土
写真右下：稲荷山の全景



稲荷山古墳の石室実測図

稲荷山古墳の出土品

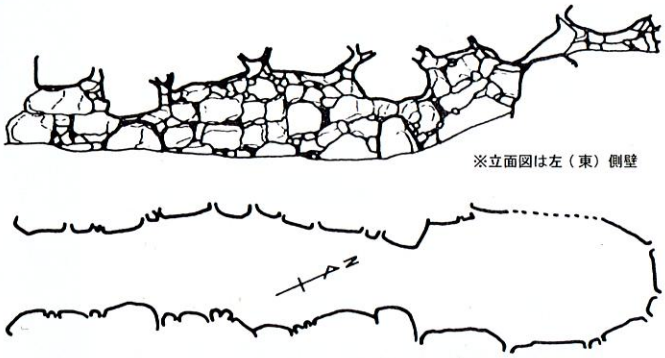
5. 井高1号古墳（富加町指定史跡）

井高１号古墳は富加町滝田字宮前にあり、丘陵を背にして、前方には川浦川が流れる水田地帯にある古墳で、古くから「滝田の火塚」と呼ばれていました。昭和 35 年に富加村(当時)指定史跡になり、現在は富加町指定となっています。

古墳の形は、四角形の「方墳」と考えられています。発掘調査がおこなわれていないので詳細は分かりませんが、一辺の長さは 20mを超え、二段築成の可能性が想定されています。平成 13 年度に古墳の南東コーナが崩れたため、復旧調査をした際、長径 30 cmほどの砂岩の川原石が表面に葺かれていることが分かりました。現在は土に覆われていますが、築造された当時は川原石で表面を覆われていたと考えられます。

石室は横穴式石室で、羨道部は約 3～ 5m、玄室は約 8mで前室部と後室部に分かれています。石室の石材はチャート礫が主体ですが、砂岩の川原石も一部に使われています。

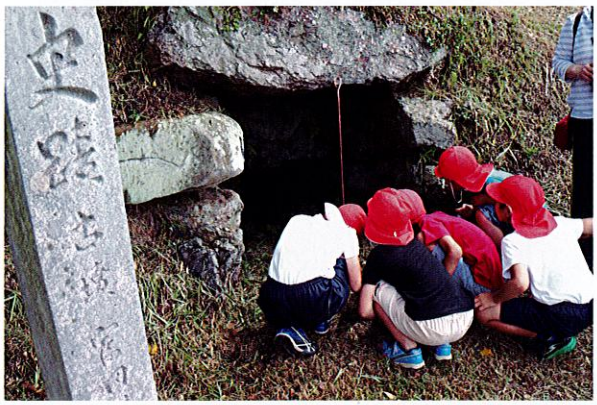
井高 1 号古墳は出土品が知られていませんので詳細な築造時期は分かりませんが、美濃地域では 6 世紀後葉から 7 世紀前葉にかけて 20mを超える大型の方墳が有力首長層の墳墓として採用されます。近隣の大型方墳の類例として坂祝町取組にある火塚 1 号墳や、可児市川合にある次郎兵衛塚 1 号古墳が挙げられます。特に次郎兵衛塚 1 号古墳とは墳形や石室構造などもよく似ています。井高 1 号古墳の築造時期も 6 世紀後葉から 7 世紀前葉と考えられます。



※立面図は左（東）側壁

井高１号古墳の石室実測図

井高１号古墳の玄室（玄室から入口をのぞむ）



石室を覗き込む子どもたち

井高１号古墳遠景

＜引用文献＞
(財)岐阜県文化財保護センター 2002『後平茶臼古墳・後平遺跡』
富加村教育委員会 1970『富加村の古墳』
富加町教育委員会 2006「井高１号古墳修景」『富加町内遺跡発掘調査報告書（平成 14～17 年度』

発行年月日：令和２年 12 月１日　発行者：富加町教育委員会　編集協力：NPO 法人にわ里ねっと　写真協力：中野耕司
※このリーフレットは「とみか歴史探訪2020」の資料用に作成したものです。本事業は清流の国ぎふ振興補助金の交付を得て実施しています。